

## ■ 休暇

帝国暦四八四年二月、ラインハルト・フォン・ミューゼルとジークフリード・キルヒアイスは、約半年余りにわたった長期任務を終え、オーデン帝都へ帰還した。任務達成の結果、中佐だったラインハルトは大佐の位階を約され、キルヒアイスもまた大尉の肩章を帯びる身となることが決まっている。

ラインハルトは一七歳までにまだ一ヶ月余り、キルヒアイスもまた一七歳となつて一ヶ月足らずでしかない。約一年半前に幼年学校を卒業してわずかに一年半。ラインハルトは六つの階級を、そしてキルヒアイスでさえ四つの階級を駆け上がるという、恐るべき昇進のスピードだった。

他の多くの帝国軍人にとつて経歴の終点である大佐ですら、ラインハルトにしてみれば、単なる通過点でしかない。いや、帝国軍人として究極ともいふべき元帥位ですら、豪華な黄金の髪の少年にとつては目的を達するための一手段と言うにすぎなかつた。

「そう言えば、ご存じですか、ラインハルトさま。士官学校の戦術教官の……」

キルヒアイスが上げたのは、彼らが幼年学校時代に受講した、士官学校の戦術教官の名だった。

「ああ、あの講座は面白かった」

軍人らしからぬ長髪と、綺麗に整えた口髭が印象的な、端正な紳士だった。まだ大尉か少佐くらいだったはずで、年齢も三〇前に見えた。

この教官がラインハルトの記憶に強い印象を与えたのは、彼がどのような教科書も使わなかったことだった。代わりに膨大な過去の戦史や歴史の文献から抽出した戦訓や事例を中心としたケース・スタディを行い、時には数日ばかりでのシミュレーションを生徒たちに課したのである。

☆☆☆

ラインハルトの興味をさらに惹いたのは、このシミュレーションだった。

「全般状況はこうだ。貴官らの部隊の任務は拠点Aアに立てこもった敵軍を撃退し、当該の拠点を奪取するにある」

立体スクリーンの一点が点滅し、拠点Aとされたポイントが青くフラッシュし、さらに部隊の配置が紅く点滅した。

「これに対するに敵軍は二個部隊を増援として動員し、拠点Aの敵軍部隊を救援しようとしている」

生徒たちは視線をスクリーンに集中し、敵の増援部隊の配置が表示されるのを待ったが、スクリーンに変化はなかった。

教室内にざわめきが広がり、生徒たちは不審の視線を投げ合っていたが、ついに一人が立ち上がった。

「教官殿、なぜ敵増援部隊が表示されないのですか。故障でしょうか？」

「故障ではない。これが現時点で得られる情報のすべてだ」

「……しかし、敵軍の配置が分からなければ作戦を立てようがありません」

ラインハルトがキルヒアイスの腕をつついたのがこの時だった。

「戦場で常に敵の情報がすべて手に入るとは限らない。そういう意味だな」

「ええ……ということとは、拠点Aに本当に敵が籠もっているかどうかも、分からないのではないで

しょうか？」

「その通りだ……なるほど、そういうことか……」

教室内が、生徒たちの漏らす不満と不安の唸りで満ちるのを、教官はあっさり無視した。生徒を二人一組のグループに分け、一人が司令官役。もう一人が参謀長役を務めるように命じると、シミュレーションの開始を告げた。なおも教室内は、異例の課題を命じた教官への反感の囁きが交わされ続けたが、命令が変更されることはなかった。

結果から言えば、ラインハルトとキルヒアイスはあっさりこの課題をクリアした。キルヒアイスが立案した、周辺宙域を数万の宙域に分けて個々に索敵部隊を派遣するという、綿密極まりない索敵計画によって、接近する敵の増援部隊の捕捉に成功したのだ。

「敵は二個部隊。一方は我が軍とほぼ同数、これを

ベー B 部隊。他方は約半数で。こちらは C 部隊と呼ぶことにします。両者、ほぼ等距離を保ち、同速度接近してきます」

キルヒアイスの報告に、ラインハルトの判断は即断に近かった。

「全部隊を出撃させ、B部隊を叩く。理由は分かるな？」

「わざと兵力に粗密を作っています。つまり、C部隊は困ということになります」

「そうだ。C部隊を先に叩き、ついでB部隊を個別撃破する策もあるが、兵力の少ない部隊を叩いても、この局面での決戦にならない。かつ、ここの部隊が問題になる」

ラインハルトが指したのは拠点Aに立てこもる敵軍だった。シミュレーション開始時の説明では、この部隊が動く可能性については一切言及されていないが、ラインハルトは言う。可能性が言及されていないこと、可能性がないことは同義ではない。

「押さえの部隊はにおいてあるにしても、Aの部隊が突出してくれば、吾々がC部隊の次にB部隊と衝突したくらいのタイミングで、戦場に達する可能性がある。そうなるかどうか？」

「開放空間で二倍近い敵を迎え撃つことになります。ラインハルトさまでも、打つ手はありませんか？」

「ああ、ないな」

ラインハルトの美貌に虚勢はなかった。小さく微笑い、付け加える。

「俺だってどんな戦場でも勝てるわけじゃない。勝てる手段があるのに、わざと負ける手段を採る必要はないだろう。そうは思わないか、キルヒアイス」

その通りだった。ラインハルトの思い切った突出は、完全に敵B部隊の意表を突いた。先手を取った勢いそのままに、ラインハルトは敵部隊を縦横に切り裂き、その中央を突破して敵の戦列を完全に崩壊させた。敵の組織的抵抗が終熄した段階で、やはりキルヒアイスが張り巡らした索敵網が拠点Aの敵部隊の突出を捕捉する。ラインハルトは押さえの部隊を後退させつつ、この部隊に応戦させる。両者が接触し、交戦が始まった、まさにそのタイミングで、ラインハルト直率の部隊が戦場に雪崩れ込んだのだ。敵のC部隊が応援に駆けつける暇はなかった。敵のB部隊は潰走、拠点Aの部隊もまた半壊で拠点に逃げ込んだ後を追尾された結果、拠点は失陥。

「見事な戦場諜報と索敵、そして戦闘部隊の指揮だった」

戦術コンピュータ、教官の講評ともラインハルトとキルヒアイスの完全勝利の判定だった。

他の生徒たちで、ラインハルトたちのような成功を勝ち得た者は少なかった。

多くの生徒たちが、兵力の少なさを見てC部隊の迎撃を優先した結果、B部隊と拠点Aの部隊に挟撃されて敗走するか、あるいは索敵を軽視した結果として増援部隊の所在を掴み得ないままに敵の包囲網に陥って白旗を掲げざるを得なくなったのである。

特に拠点Aに籠もっていたはずの敵部隊が突出する可能性について、事前のシミュレーション・ルール説明で一切言及されていなかったことが、生徒たちの憤懣を誘ったようだった。

「シミュレーション・ルールは言ってみれば作戦命令書のようなものだ。作戦命令書に、そのような重大な可能性が言及されていないのは、シミュレーションとして不完全ではないのか」

などと抗議した生徒が多かったが、教官は一顧だにしなかった。

「戦場ですべての情報が、時宜に即して正確に手に入るなどと考える方がよほどどうかしている。戦場では、情報は足らず、間に合わず、当てにならず、が普通なのだ。今回の作戦シミュレーションは、そうした戦場の実情を諸君に知って貰うのも一つの目

的である」

一方、ラインハルトたちの成功は士官学校の生徒たちの目を大いに引き寄せることになった。決して好意ばかりではなく、『何、運が良かっただけさ』などというやつかみに近い声も少なくはなかったのだが、他に完勝を得た生徒がいなかったのは事実である。

「今後も、同様な多数の敵による被包囲状態に陥った時、常に多数の敵を優先して攻撃するのか？」

講評の中で、他の生徒からの質問を受けたラインハルトは答えている。

「必ずしもそうはならない。いずれの部隊への攻撃を優先するか、あるいは敢えて固守を図るかは戦場の状況による。一般的な回答などはない」

☆☆☆

「あの教官が更迭された？」

「エル・ファシルという星系をご存じですか？」

「……いや、記憶にないが、同盟……反乱軍の支配星系か？」

「ええ……イゼルローン回廊反乱軍領域側出口から、かなり入った宙域にある星系だそうです」

約四年前、彼ら二人がまだ幼年学校の下級生徒だったころ、帝国軍は高速機動部隊によるエル・ファシル星系への長駆攻撃を企図したのである。帝国軍の前衛部隊は、エル・ファシルの同盟軍守備隊を壊滅状態に陥れ、その後、後続部隊の増援を得て、帝国軍にとって長年の夢とされてきた『反乱軍領内深部における橋頭堡の獲得』実現の半歩手前にまで達したのだ。

イゼルローン要塞を確保している有利さから、これまで帝国軍は何度も同回廊の同盟領側宙域を突破してきた。前衛基地を設けたことも一再ではないが、常にその維持を果たせず、同盟領深部への侵攻計画は挫折している。基地を設けても、その補給路は同盟軍の制宙圏内なのだ。補給路の維持は至難の業であり、結局、基地は設けられた数だけ放棄されている。

帝国軍がエル・ファシルに目を付けたのには幾つかの理由がある。比較的イゼルローン回廊出口から近い宙域にあること、中間宙域に一時的な拠点として利用可能な浮遊惑星が発見されていたこと、そして反乱軍に属する住民三〇〇万人余が居住していたことである。

特に三〇〇万人の住民は、ひとたび占拠できれば、そのままこの惑星を帝国軍に対する巨大な兵站補給基地として利用できることを意味していた。住民を支える工業・農業両面の生産能力、そして整備されたインフラストラクチャーも魅力だが、それ以上にそれら施設を運営できる労働力が、惑星の占領によつてそのまま入手できるのである。

「彼らは、畏れ多くも皇帝陛下に対し奉り、叛逆の旗を掲げた憎むべき大逆の徒でしかない。現地でもいい潰しに使い潰してしまえば、矯正施設に送り込む手間が省ける。彼らが死に絶える前に、帝国領から新たな奴隷を送り込めばよいのだから」

作戦を主導した高級将官の中には、そんな放言を躊躇わない者も少なくなかったようだ。

エル・ファシルを制圧できれば、イゼルローン回廊の出口は完全に帝国軍の制宙権下に陥ることになる。帝国は、反乱軍に対して決定的な地理的・戦略的優勢を確保することができたはずだった。

「占領は失敗しました」

キルヒアイスの説明は端的だった。敵の艦隊を殲滅し、その指揮官を含む艦隊首脳全員の降伏という

戦果を得たにも関わらず、三〇〇万人余のエル・ファシル住民は帝国軍の手をすり抜けての脱出に成功。残された空の星系を前に、帝国軍首脳は勝利の祝杯を叩き割ったという。

「何が起きたんだ？」

「帝国軍は大規模な移動体の群れを発見していました。しかし、余りにもはつきりと電子観測網に捕捉されていたため、我が軍の指揮官は大規模な流星群を捕捉したものと考え、監視を注視したそうです」

「それが反乱軍住民の脱出船団だった、というわけか」

「その通りです。彼らは敢えてレーダー透過装置などを装備せず、自らの姿をさらけ出す形で、しかも、彼らの守備隊が星系の守りを放棄して離脱を図るのを待つて、星系を発したようです」

キルヒアイスの予想に反して、ラインハルトが、水晶の煌めきわたるような微笑でその美貌を彩るところはなかった。形の良い眉を微妙な角度に歪めると、キルヒアイスが作戦図を表示させた立体スクリーンに見入っている。

「……レーダーに映るものは人工物にあらず……か。先入観の裏をかかれたということだな。敵にも中々

できるやつがいる、というより、こんな単純な罠にひっかかった我が軍の方が恥じるべきだな」

蒼氷色の視線が翻って、キルヒアイスを正面から捉えた。

「……で、このエル・ファシルとあの教官の更迭とどうつながるんだ？」

「あの教官は、この戦いを士官学校の戦術教材に使ったそうです」

「ん……？」

一瞬、不得要領の表情に秀麗な容貌を支配させたラインハルトだったが、直ぐに理解に取って代わらせた。

「つまり、我が軍の恥を、前途ある士官学校生徒に知らしめた。それが不見識だというのだな」

「もともと、決まった教科書を使わないということと教育総監部からは睨まれていたようです。エル・ファシルの戦いは公開を禁じられていました。それを教材化したことが更迭の口実にされたとのことですよ」

「馬鹿馬鹿しい」

吐き捨てる口調の言葉が、絶妙な形を描くラインハルトの唇から迸り出た。

「重要なのは失敗を罰することじゃない。恥だ何だと隠したり、当事者を罰してそれで事を済ませてしまったりしたら、何の進歩もないじゃないか……キルヒアイス、あの教官のことは調べておいてくれ。いずれ……」

「承知しました」

ラインハルトが省略した言葉をキルヒアイスは正確に理解し、頷く。いずれ、彼らが元帥府の幕僚にその名を連ねるべき軍人達のリスト。今は、彼らの胸の裡のみ蔵されているリストが厚く、長くなるほどに彼らの大望が達せられるまでの時間は短くなるはずだった。

「……そう言えば、今年は食べ損ねたな。いや、去年、か」

ふつとラインハルトが話題を変えた。長期にわた

*Weihnachten*

る任務は年を越え、彼らはクリスマスと同盟領から帰還する巡航艦の中で迎えることになった。

宗教がその力を失ったこの時代、それでも宗教を起源とする祝祭までが廃れきったわけではなく、帝

*Weihnachten*

国でもクリスマスには祝賀の食事を摂り、子供には靴下に入れたプレゼントを贈る習慣は健在だった。

「シュトーレン……ですね」

キルヒアイスの応答が笑いを含んだ。シュトーレン……『洋酒に漬け込んだドライフルーツやナッツが生地に練り込まれ、表面に砂糖がふんだんにまぶされている菓子パン(説明が長いかな?)』……は、

*Weihnachten*

甘い物好きなラインハルトが特に好むクリスマス期の嗜好品……要するにお菓子……だった。帰路、補給部隊指揮官の配慮で、それなりの祝賀用の食品を補充はされたが、残念なことにシュトーレンは含まれていなかった。

「では、クーリヒ夫人にお願ひしてみましよう。きつと作つて下さると思います」

「ああ、頼む」

「その代わり……」

キルヒアイスはちよつと意地悪そうに見える微笑で応じる。

「クーリヒ家の武勇伝の拝聴役はお願ひします」

満面に浮かんでいたラインハルトの微笑が渋面に変わった。

「賜暇のことか？」

二人の間で休暇の話題が出たのは、その日の夕食、半年余り振りに大家のクーリヒ夫人の手になるフリカツセを堪能している最中だった。

「夏だつたらな……」

ラインハルトが脳裏に浮かべたのは、既に白銀の輝きに包まれたフロイデン山系の風景に違いなかった。夏期であれば、そして時期さえ合えばフロイデンの山荘に姉アンネローゼを訪ねて賜暇の期間を費やすことができる。それが叶えば、一週間の賜暇であっても数ヶ月の休養に勝る貴重極まる時を得られるに違いなかった。

今は厳冬期であり、アンネローゼの山荘のあるフロイデン山麓もまた雪に閉ざされている。無論、人跡未踏の地などではなく、ラインハルトたちも一度となく厳冬期のフロイデン山麓に足を踏み入れた経験があった。

ノイエ・サンスーシ  
だが、今は肝心のアンネローゼは新無憂宮

に留まつており、この冬は山荘を訪れる予定がないという。彼女と共にフロイデンの冬を過ごす機会は来年以降に持ち越すしかなさそうだった。

「おや、お休みを頂けるの？」

耳ざとく二人の間で交わされた単語を拾い上げたのはフーバー夫人だった。

「どのくらい、お休みできるのかしらね？」

「……明後日から、五日間です」

キルヒアイスは答えた。

「半年も宇宙に行つていた割に短いのねえ」

半年余りに及ぶ秘密任務の後である。一ヶ月以上の休暇が与えられてもしかるべきところだったが、彼らが就いていた任務自体が公開を憚る内容……開発中に持ち去られ、叛乱軍……自由惑星同盟に持ち込まれそうになった帝国軍の機密兵器を、これも秘密の内に奪還する……であつたこともあり、通達された賜暇の期間は短い。無論、秘密任務云々は口にしない。

「ずっと宇宙に出ずっぱりというわけではありませんんでしたから」

「五日間では遠くまででは行けないけれど、帝都の近場にもいろんなところがありますよ。そうだ姉さん、あそこはどうかしら、ええと、何と言つたかしら、ほら、温泉のある……」

「あの、フーバー夫人……」

キルヒアイスは慌てて言葉を差し挟むが、聞いているような大家姉妹ではない。体の幅では妹の半分しかないが、悠揚迫らぬ落ち着き振りは決して妹に劣ることのないクーリヒ夫人がおっとりとした身ごなしで席を立つた。

「そうね、たしか……グラスブリュンネン……  
だったかしらね……写真もあつたはずよ」

「あ、あの別に吾々は……」

強いてまで出かけるつもりはない……言い止し、キルヒアイスは諦めた。交互に情報端末をのぞき込み、ああでもないこうでもないと言葉を交わし出すと、もはや二人の若者の言葉など耳に入れるような夫人たちではなかった。無論、悪意のしからしむるものではなく、むしろ純粋に好意ずく……  
ノイエ・サンスージ

新無憂宮や帝国軍において、滅多に接することのできないものだ……によるものだというのを、二人は充分以上に心得ている。

彼らが幼年学校を出たばかりの少尉と准尉であろうと、既に大佐と大尉、彼女たちの亡き夫たちよりも高い位階を得た中堅士官となつていようと、彼女らにとつては二人が二階の下宿人の少年たちか

ら変わることはないのだ。

「確かね、ついこの間、軍の方から問い合わせがあつたんですよ」

「軍から？」

ラインハルトの眉の動きが黄金色の光を帯びてキルヒアイスの目を射た。

「誰ですか？」

「確か……軍の広報部の人って言っていたように  
思いますけど……昔行つたことのある保養地の中で一番思い出の深いところはどこですか……  
その時に思い出して調べたのよ……ああ、あつた、  
これよ、これ、やっぱりグラスブリュンネンね」

意気揚々とクーリヒ夫人が情報端末を操作する

ソレビジョン

と、立体TVスクリーン一杯に、ある風景が浮かび上がった。相当な標高の、地平線までうねうねと濃緑色の草原の続く平原。大きく黄土色に崩落した一角の地表から真つ白な濛気が立ち上つている。風景の中央、濛気を遠景に笑顔を並べているのは、若き日のフーバー夫人とクーリヒ夫人、彼女らと肩を並べている男性たちは彼女らの亡夫たちと覺しかった。

「これは？」

滅多にないことに、ラインハルトが意表を突かれた表情で問うた。宇宙では、およそ人の想像を超えた光景など、それこそ星の数ほど出くわすことになるのだが、ラインハルトもキルヒアイスも惑星上の絶景とは縁がなかった。

クラリベル

母 が亡くなって以降、ラインハルトには家族と共に遠出をした経験がない。キルヒアイスも、帝都から遠く離れた地へ赴いた経験のほとんどはラインハルトと行を共にしたものである。

「グラスブリュンネンという場所ですよ、金髪さん。温泉が出ていてね、帝都の近くでは一番有名な保養地になっていんです。帝国軍の保養施設があつて……」

「そうそう、一緒に出かけたわねえ。もう二〇年前になるかしら。うちの人なんか、山の中だと釣りができないじゃないかとか何とかね、いろいろごねるのを何とか説得して、出かけたんだけど、けっこう良いところだったわよ。地面から勝手に湯が沸き出しているの」

「お湯に怪我とか病気の治療の効果もあるんですよ。」

軍の病院もあつて、何か月もそこで療養している傷痍軍人さんにも会いましたよ。みんな、来て良かったって言つてました」

「せっかくお休みを頂いたんだから、行つてらっしゃい。あなた方は若いから何日も行かなくても良いでしょうけど、良い話のたねにはなりますよ……そうそう、保養所に連絡を入れておいてあげましょう」

「あの、クーリヒ夫人、別に、僕たちは……」

戦場では怖れとも怯懦とも無縁な二人だったが、さすがに大家の未亡人二人が交互に注ぎ込んでくる言葉の十字砲火の前には、ただ呆然としているしかなかった。

「キルヒアイス……」

先に白旗を掲げたのはラインハルトだった。

「半年も宇宙に出ていたんだ。一日や二日、地上で過ごすのも無駄にはならないさ」

「ラインハルト……さま？」

大望に向けてただの一日も無駄にしたくない。彼だけが知るラインハルトの常の口癖とは正反対な一言に、キルヒアイスは驚いた。

ラインハルトはなおも、そのグラスブリュン

ネンなる土地のことを話し続ける二人の未亡人を掌で指し示して見せた。あるいは一六歳の少年らしい好奇心が、わずか数百キロの距離に位置する、見知らぬ土地への関心を呼び起こしたのかも知れなかった。

「どんなに策略を巡らそうが、計画を練ろうが、一切を放棄して流れに任せるしかないときがある……」

「今がその時だ……と？」

最上級の白大理石から削り出されたように形の

おとが

良い頤おとがを軽く引き、ラインハルトは苦笑と共に頷いた。

「それだけじゃないが、その通りでもあるさ。お前に何か策があるなら、話は別だがな」

あるはずがなかった。

## ■ グラースブリュンネンにて

「意外に遠いな……」

隣席のラインハルトの眩きがキルヒアイスの耳を打った。

キルヒアイスは友人の秀麗な横顔に目をやった。

自動運転モードである。脇見運転の心配はない。

オーデン

帝都からグラースブリュンネンまではカテゴ

リーの完全運転モードがサポートされた自動車専用道路が繋がっている。

また、幼年学校時代に取得した地上走行車の操作資格試験……要するに運転免許である……も、戦場以外での運転は一八歳まで凍結されている。

一方、臣民が『楽しむ』ことを宗教上の禁忌のように嫌った『偉大なるルドルフ』の影響で、特に帝都屋では、いわゆる行楽地への公共交通機関が整備されていない。フロイデン山麓の一角に属することもあり、グラースブリュンネンには航空機も通じて